

## 『主にあって』 ピリピ人への手紙 4章1~7節

### 1. あなたの基盤は何

本日から4章に入ります。1節に「ですから、私の愛し慕う兄弟たち、私の喜び、冠よ。このように主にあって堅く立ってください。愛する者たち。」とあります。自分の信仰がいったい何に基づき保たれているのか、キリスト者は常に確認する必要があります。イエス様は、マタイの福音書7章24~27節で「ですから、わたしのこれらのことばを聞いて、それを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人にたとえることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家を襲っても、家は倒れませんでした。岩の上に土台が据えられていたからです。また、わたしのこれらのことばを聞いて、それを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人にたとえることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもその倒れ方はひどいものでした。」と教えています。人間が勝手に作り上げたものではなく神が築いてくださった基盤の上にキリスト教信仰は保たれています。この基盤には信仰がもたらす「つまづき」と「安全さ」の両方が含まれています。

多くの人は自分の力で自分のための「救い」を作り出したいと願っています。しかし聖書は私たちにたった一つの道だけを示しています。ヨハネの福音書14章6節でイエス様は、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」と言いました。人が救われるにはひとえに神の御業によるものです。この真理を認めようとしないかぎり人は救いの確信をもつことが決してできません。人間の行いはいつも欠けたところがあり不完全なものであるため、それに依り頼んで何らかの「救い」をねつ造する試みは今までたっても不確実なままだからです。

### 2. 主にあって

1節の「主にあって堅く立ってください。」は、3章17節で言われていることと同じです。17節「兄弟たち。私に倣う者となってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。」とあります。パウロは、自分をモデルとして提示します。そして、自分のように歩むことが「主にあって堅く立つ」ということだと言うのです。では、一体パウロは自分の何をモデルにせよと言うのでしょうか。それは、パウロの性格といったものではありません。人間はどんなに偉い人でも欠けを持っているものです。私たちは、神の御前に誇れるところなど少しもないのです。そのことをよくよく知っていたパウロです。だったら、パウロは自分の何をモデルとして提示しているのでしょうか。それは、信仰ということになるでしょう。また、天を見上げ、主が再び来られる時に眼差しを向けて生きるということです。この世のことしか考えない、自分の損得しか考えられない、そのような自分と決別するということです。

しかし、その様なことが私たちに出来るでしょうか。パウロはここで「堅く立ってください。」と言うのですが、その前に「主にあって」という言葉を付けているのです。これが大切です。私たちの歩みのすべてを支配し、導いてくださるのは「主イエス・キリスト」です。イエス様が道を拓き、招き、共にいて導いてくださるのです。私たちは、このイエス様の御手にあることを信頼して、安心して祈りつつ、天の御国に向かって歩んでいけば良いのです。確かに、私たちの眼差しは天に向いている。それは、そうさせようとする力が、天から私たちにいつも働きかけてくださっているからです。それに対して、この世のことしか考えさせないようにする誘惑があります。「天ではなく、この地上の現実が大切なのだ。」目の前の現実は大切です。その目の前にことにしっかりと対応していかなければなりません。しかし、それが全てではないのです。それなのに、それが全てであるかのようにそそのかすのは、罪の誘惑であり、サタンの誘惑です。残念ながら、私たちはこの誘惑に勝つことは出来ません。しかし、イエス様は勝たれました。神のひとり子ですから、負けるはずが

ありません。ですから、パウロは「**主にあって堅く立ってください。**」と言ったのです。主に依り頼んで、主の守りと支えを求めて、主と共に歩んでいくなら、全く心配はいりません。私たちの信仰は、どこまでも「**主にあって**」なのです。

この「**主にあって**」という言葉は、英語では”in the Lord”と訳されています。元々のギリシャ語では、「エン・キュリオー」です。これをどう訳すのか、なかなか日本語になりにくい小さな言葉です。しかし、事柄にそって大胆に訳すとすれば、「**主の中で**」とか「**主に包まれて**」とも訳すことが出来るのではないかと思います。この小さな一句は、パウロの手紙の中に、それこそ、何十回と出てきます。

1節で「**主にあって堅く立ってください。**」、2節では「**主にあって同じ思いになってください。**」、4節では「**いつも主にあって喜びなさい。**」とあります。さらに7節では「**あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。**」とあります。同じことを示しています。「**堅く立ってください。**」「**同じ思いになってください。**」「**いつも喜びなさい。**」「**守ってくれます。**」これらの勧め、励まし、希望が、全て「**主にあって**」という小さな言葉によって結びつけられているのです。もし、「**主にあって**」という言葉が抜けているのならば、これらの勧め、励まし、希望の言葉は、何の意味もなさない、力のない気休め、無理な要求といったものになってしまふでしょう。主の中で「キリストの中で」「**主に包まれて**」、この私たちに与えられている恵みの現実の中で、これらの勧め、励まし、希望は意味のある、力を持つ言葉となるのであります。

### 3. 人間関係において

パウロがこの手紙を送ったピリピの教会には、小さなこととして捨てておけない、二人の婦人の対立がありました。ユウオディアとシンティケという二人の婦人です。ユウオディアという名前は、「良い道」とか「良い香り」という意味です。もう一人のシンティケは「幸運」という意味です。この二人について、私たちはここに記されていること以外には何も知ることは出来ません。二人の名前は、聖書の中でここだけにしか出てこないのです。どうして、何が原因で、この二人の婦人が対立してしまったのか、それも判りません。判っていることは、この二人の婦人はパウロがピリピでの伝道をし、教会の礎をすえた時に、パウロと共に福音のための戦いをした者であるということです。二人はピリピの教会の古くからの信徒であり、それ故にピリピの教会においても指導的な立場にいた人たちだったのではないかと思われます。ですから、二人の対立は単に個人的な問題に留まらず、教会全体をまき込んだ、深刻な問題となっていたのではないでしょうか。

パウロは、この二人に和解の道を示します。それは、「**主にあって同じ思いになってください。**」というものでした。仲たがいをし、対立している二人が、どうして同じ思いを持つことが出来るのか。感情的な対立、もつれもあったでしょう。この様な場合、人間的に考えれば、和解をするのはとても無理だということになるのかもしれません。

例えば会社の話し合いや国家の内外の交渉、さらにはキリスト者同士の間の争いにおいても、敵対し合う者たちの間のこう着状態を緩和して両者を再び話し合いの場につけるために外部の調停者が必要になる場合があります。注意をしてみなければならぬのは、パウロはここでこの二人のどこが悪いとか、どちらが間違っているというようなことにはふれていません。これは大事なことだと思います。どっちが悪いということはできないけれども、お互いにどうも気にいらないらしいのです。おそらく、どちらもある熱心さから善意で何かを口にしたのでしょう。そして、これは、私たちの誰もが例外なくしてしまうことでもあります。問題は、善意で注意をする、忠告をするのです。「こうすればいい」、「こうすることはあなたのためになると、私は思って言うんだけれども」、少しでも良くしたいという思いからの発言は、本人にしてみれば相手への配慮です。あるいは、そういうことで教会全体を良くしたいと思っている。けれども、言われた方からしてみれば、自分を否定されているとしか考へることができません。これは、言われる側に自分がなったことを考えてみればすぐに分かることです。誰にも言わず、心の中に納めてそれで終わりにできるなら、よほどその

ほうが建設的です。しかし、それも気づかれるまでの間のことなのかもしれないですけれども。要するに、人のことを悪く言うことは簡単なのです。しかも、言っている本人は批評家気どりになりやすいのです。これは、いつも気をつけなければならぬことです。自分の言いたいことに集中してしまうと、配慮を欠いてしまうのです。もちろん、教会の中だけの話ではありません。もし、私たちが気づかない間に、こういう会話をし続けているとしたら、結果はどうなるのかということにまで思いを働かせる必要があります。

しかし、パウロはここで「**主にあって**」と言っています。主の中で、主に包まれるならば。主イエス・キリストの和解の福音に共にあずかっている者、共にキリストの血と肉とにあずかっている者なら、このただ一つの恵みの中に共に立つのなら、道は開かれていく。パウロはそう確信しているのです。それは、パウロの個人的な確信ではありません。約束された福音の力に対しての信頼なのです。福音は平和を与えます。神の平和をもたらします。それは神と人との間だけではなくて、人と人との間にも平和を与えるのです。教会に、家庭に、世界に平和を与えるはずなのです。パウロはここで、この二人の婦人の人間的な資質に期待しているではありません。「**主にあって**」です。私たちに和解が可能であるのは、共にキリストの恵みの中におり、共に神の国への道を歩んでいる者であるという事実に目を向けることによってでしかありません。お互いを見ていれば、気が合わないこと、腹が立つこと、どうしてそうなのかと言いたくなることは山ほどある。しかし、お互いがただ一つの目標、神の栄光の為に、天の御国に向かって共に歩んでいることに気付きさえすれば、同じ思いを抱くことが出来るはずなのです。

#### 4. 喜びなさい

さて、3節に「**そうです、真の協力者よ、あなたにもお願いします。彼女たちを助けてあげてください。**」とあります。この真の協力者とは誰なのかは判りません。しかし、この二人が互いに「**主にあって同じ思い**」となるためには、二人を支える人が必要だったということなのでしょう。和解の務めを果たす人が必要だったのです。これは、どちらかの味方をするというようなことではなくて、二人が互いに「**主にあって**」という恵みの中にあることを知らせるつとめであると思います。これが「**とりなし**」ということです。キリストの和解の福音を与えられた私たちには、この「**とりなし**」の務めがあるのです。神と人との間の和解を受けた者は、人と人との間の和解を造り出す者として召され、遣わされているのです。

この「**とりなし**」という言葉は、対立している者を互いにキリストの十字架の前に連れていくということではありません。キリストの十字架の前に真実に立つ時、自らのプライドも思い上がりも打ちくだかれ、ただ、主のために何をなすことが出来るのか、人と比べるのでもない、なすべきことを主にささげていくだけという、謙遜な思いが与えられるのでしょう。そして、そこで初めて、私たちは「**主にあって同じ思いになる**」ことが出来るのです。

4節、パウロは二人の婦人の対立の故に、厳しい状況の中にあるピリピの教会の人々に向かって「**いつも主にあって喜びなさい。**」と励まします。私たちは、しばしば厳しい状況の中で、喜ぶことを忘れるのです。目の前の厳しい状況が全てであるかのように思ってしまうのです。しかし、どんな厳しい状況が私たちの前に立ち現れてこようとも、それは全てではありません。主においては、主の中では、それらの問題は、既に解決されているのです。そのことを信じ、主に委ねるのです。主は私たちの全てをご存知です。そして、全てを支配しておられるのです。私たちの小さな頭の中では、もうどうにもならないと思ったとしても、主においては、すでに解決されています。

ピリピの教会の人々にとって、**ユウオディアとシンティケ**の問題は解決不可能な問題に見えたかもしれません。これによって教会も混乱していくばかりと人々は思っていたかもしれません。そういう中で、ピリピの教会の人々は、「**主にあって喜ぶ**」ことを忘れていたのです。だからパウロは、「**いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。**」と告げているのです。信仰に生きるということは、主において喜ぶ者、

常に喜ぶ者として生きるということと同じなのです。キリストの愛は、私たちをそのままに捨ておかれるはずがないし、キリストの力は私たちのどんな状況をも打ち破ることが出来ます。私たちには出来なくても、神には出来ないことは何もないのです。

イザヤ書 55 章 11 節に「**そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、わたしのところに、空しく帰つて来ることはない。それは、わたしが望むことを成し遂げ、わたしが言い送ったことを成功させる。**」とあります。神の言葉、神の約束は、必ず私たちの上に成就するのです。私たちは、そのことを信じる者として生かされているのです。

## 5. 思い煩いからの解放

6 節で「**何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。**」とも言われています。ここには、「**主にあって**」という言葉は付いていませんけれど、内容から言えば、ここにも「**主にあって**」が付いていると考えて良いでしょう。誰も好きで思い煩っている訳ではないのです。しかし、「**主にあって、何も思い煩わない**」と言われば話は別です。だから、次に、「**あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。**」と続いているのです。マタイの福音書 6 章 32 節に「**これらのものはすべて、異邦人が切に求めているものです。あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。**」とあります。私たちが何かについて祈り願う前からすでにイエス様はすべてをご存じです。しかしそうだとしたら、なぜ私たちは祈る必要があるのでしょうか。祈りは決して一方通行的なものではないからというのがその答えです。祈りは私たちからイエス様への語りかけにすぎないものではなく、イエス様から私たちへの語りかけでもあります。祈りはイエス様の態度を変えるためというよりも、むしろ祈る本人の方を変えて行くことができる働きなのです。

「**キリスト・イエスにあって**」とあります。キリスト・イエスの中で、キリスト・イエスに包まれてです。イエス様の中で、私たちの全てはすでに知られ、すでに担われ、すでに解決しているのです。イエス様が私たちの主、主人であるとは、そういうことなのです。イエス様が、私たちの人生の主人となって下さっているとは、そういうことなのです。この恵みの現実に目を向けなければなりません。まるでイエス様がいないかのように、目の前の出来事が全てであるかのように考えてはならないのです。それでは、イエス様が復活したにもかかわらず、死んだら全ておしまいだと思っているのと同じです。もし、私たちが喜んで生きられないとするならば、それは私たちの置かれている状況が厳しいからではなく、**主の中で、主に包まれて生きている、生かされている**ということを、きちんと受け取っていない、忘れているからなのではないでしょうか。私たちは思い起こさなければなりません。

パウロは「**主は近いのです。**」と言います。これには、二つの意味があります。一つは、**主イエスは直ぐにやつて来られる、主の再臨は近い**という意味です。もう一つは、**主は私たちのすぐそばに、私たちと共におられる**という意味です。これは、どちらか一方に理解するのではなく、二重の意味で私たちに告げられていると思います。主が私と共におられ、まさに私が主の中に、主に包まれている。その私の近くにおられる主が、再び来られる。その日には、私たちの涙はことごとくぬぐわれ、全き平安の中に生きる者とされる。その日に与えられる恵みを、私たちは信仰において先取りして与えられているのです。神の国において完成する神の平和が、すでに、私たちを包みこんでいるのです。この恵みに目を注ぎつつ、互いに同じ思いを持ち、常に喜びつつ、この一週も又、主と共に歩んで行きましょう。